

12	受験番号
中	

国語 その一（六枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

かつて手紙のかたちで音信を伝えていた時代は、返事がくるのをじりじりして待った。何日も待った。返事が待てないで、返事がくる前にもう一つ手紙を書いたくらいだ。ところがケータイを使ういまはもう待てない。いや、待つ必要もなくなってきた。待ち合わせのときも、以前なら約束の時間が来ても相手は来ないといらいらしたり、ひどく心配したりしたものだ。いまは遅れても途中でいまこあたりまで来たからと連絡を入れれば待ち人は別のところで時間つぶしをすることもできるし、あるいはまたもつと早く会えるように待ち合わせの場所を変更することもできる。

待てないと言え、テレビ・ドラマやドキュメンタリー番組の途中で何度かはさまるコマーシャル。視聴者はその短い間が待てないで別のチャンネルにせわしなく切り換える。ザッピングである。わたしが子どもの頃は、そもそも番組が一つの企業の提供のものが多く、コマーシャルは番組の始めと終わり二回くらいで、しかも一つのコマーシャルソングを三番まで歌っていた。

いま挙げたような例は、待てないと言ってもたわいもないものだが、子育ての場合にはもう少し深刻である。若いお母さんたちは、子どもが思いどおりに育ってくれるか、とても不安に思っている。だから、子どもがちよつとでも自分が描いているイメージと異なった考えをもったり行動をしたりすると、すぐに軌道修正に入る。それどころか、そもそも自分のイメージから外れるようなことが起こらないように、いろいろな手を打つ。けがをしないように、悪い友だちとつきあわないように、余計な遊びを覚えないうに、と。そして子どもが少しでも思いどおりにならないと、不安にかられ、神経をまいらせてしまう。子育ては母親にとって、いまや神経をすり減らすいとなみになっている。子どもがいろいろなことについて、自分で何かを学び、勝手に育つてゆく、それがいまのお母さん方には待てない。けれども、と思う。子育ての楽しみというのは、そもそも子どもという自分とは別の存在がこれからどんなふうになってゆき、将来どんな人間になるか予想がつかないという、そのことにあるのではないかと。どんな人間になるか、楽しんで待つというのが、本来の子育てではなかったのか、と。

待てないということでもう一つだけ例を挙げておくと、企業や大学にはしばらく前から「評価制度」というものが導入されている。中期計画、年度計画といったものをあらかじめ事細かに書き、そのためにしたことを計画期間ごとにくわしく書き、そのうえでその達成度をまず自己評価し、さらに外部評価を受けたいえで、報告書として上層に提出し、組織としての正式の評価を受ける。*漫然と業務をこなすその*情性を振りのけて、組織がつねに自己点検しながら無駄なく、つねに前向きに進むために導入された制度という意味では、まさに業務が**イゼン**の一環として取り組まれている。けれどもそのために作成しなければならぬ書類というのは膨大なもので、ばかばかしいことに大学などでは教育・研究と同じくらいの時間をそれに使うことになり、最近では組織の構成員がひどく疲弊し、「評価疲れ」という言葉すら蔓延している。しかしこの達成度評価では、計画を立てたときに視野にあったものを一つ一つ達成できたかどうかチェックするだけで、当初視野になかったけれどいろいろ考えた結果もつとよい方法が見つかり、それに沿って違う方向で仕事をするというような発展的な仕事はまったく評価されない。そう、創造的な仕事は

国語 その二（六枚のうち）

評価されないのだ。ここでもひとは、創造という出来事がとつぜん、予期せぬ時に起こるその時を待てなくなっている。

待てない社会、待つてくれない社会のこの病理は、いったいどこからくるのだろうか。

「待つ」というのは、なかなか危うい行為だ。とりわけ、「待つ」ことが「期待する」とことと混同されるときはそうである。「期待して待つ」というのは「待つ」ことの一つのかたちではあるが「待つ」とそのことではない。いやむしろ「待つ」ことの反対とも言えるかもしれない。

「期待して待つ」ことには、ひとを*視野狭窄へと追い込む傾向がある。何かの実現を、あるいは到来を、強く願って待つているうち、ひとはしだいにそのことばかりを考えるようになる。やがて、そのことしか考えられないようになる。

宮本武蔵は「待たせる」ことで勝った、と言われる。巖流島での決闘の前に、武蔵は約束の時刻になっても約束の地には向かわず、対岸で木刀を削りはじめ、それが仕上がると一眠りした。待たされるはめになった佐々木小次郎は、最初こそ静かに眼を落としていたが、相手が一向に姿を現わさないので、沖のほうに眼をやりはじめ。そのうち、ちよつとした白い波にも、いよいよ来たかといふ心をときめかせる。自分の勘違いだと知るとまた待つことになるのだが、そのうちあたりの気配のちよつとした変化にも過敏なまでに反応するようになる。心は騒ぎ、期待と落胆をくり返し、やがて神経がだんだんとすり減って、ついに武蔵の船が近づいたときには、心はやはり、刀を抜き、鞘を捨てて、波打ち際にまで走ってしまう。おもむろに船を降りた武蔵は、はやる小次郎に向かいこう言い放つ。「汝の負けである。勝つつもりなら鞘を捨てまいに」と。頭に血をのぼらせた小次郎は武蔵に斬りかかる……。

待つて、ついに待ちきれなかった小次郎の負けであった。じりじり待つうち、小次郎にはあたりの些細な変化がすべて相手の到来を示す徴候であるかのように思われてくる。心が騒ぎ、そのうち待つことそのことが意識の全面を覆うことになり、そして意識がひきつりだして空転しはじめる。視野狭窄にはまったのだ。そして相手の戦術を読む間もなく斬りかかって敗れた。

もつとも、「期待して待つ」ことには効用もある。わざわざ自分を視野狭窄にすることで、もつと大きなより大きな問題を考えないでいられるようにするという効用である。ナチスの強制収容所に夫婦別々に監禁された精神科医のヴィクトール・フランクルは、「無数の小さな問題にかかずらう」ことで、生きのびた。妻はどのような取り扱ひを受けているのか、いのちはまだあるか、自分の未来はどうなるのか、このまま惨殺を待つのみなのか……。フランクルは、心を掻きむしるような不安や恐怖におののいている。そこでかれは、そういう不安や恐怖を忘れるために、あえて進んでみずからを視野狭窄に追い込む。夕食の献立、そこで供されるスープをだれかの一本の煙草と交換してもらうための算段、切れた靴ひもの代わりとなる針金をだれかに譲ってもらう算段など目先のことで、当座、頭をいっぱいにする。つまり、心配ごとを「小刻み」にしてしまうのだ。小さなことで心が躍ったり、落胆したりする、そういう心の動揺にみずからを委ねることで、より大きな、より重大な問題について考えずに済むようにしたのである。（フランクル『夜と霧』参照）

では、このような「期待して待つ」とはまったく異なる「待つ」、「期待せずひたすら待つ」、そのよ

12	受験番号
中	

国語 その三（六枚のうち）

うないとなみに、何か特別な意味があるものだろうか。

日本語には「待つ」ことを表わすのにきわめて豊かな表現がある。待ちわびる、待ち遠しい、待ちかまえる、待ち伏せる、待ちあぐねる、待ちこがれる、待ちかねる、待ちきれない、待ちくたびれる、待ち明かす、待てど暮らせど、待ちぼうけ……。 「待つ」をめぐってこれほど豊かな表現があるというのは、日本人が「待つ」という言葉に深い思いを託してきたことの証だと言えるかもしれない。じつさい、万葉集から古今和歌集、さらには最近の短歌にまで、ひとがじりじりと待つことの辛さ、むなしさ、甲斐のなさを歌ったものがきわめて多く見いだされる。待つ時間の「ホウガイ」な長さを山鳥の尾になぞらえて歌った和歌は、日本人のほとんどが知っていよう。もうここにすでにうかがわれるように、「待つ」ことはたいていの場合、報われないものなのだ。

けれども、とわたしは思うのだが、期待することを断念し、祈るようにして待つていたことがらをもあきらめるなかではじめて、ほんとうの「待つ」は始まるのではないか。「期待せずに待つ」ということの意味を探るいとなみも、ここからようやくと始まるのではないか。

それにしてもなぜ、こんなにまで苦しくとも、それでもひとは待たねばならないのか。わたしたちがなす*プロジェクトはみな、先取りとか前屈みのかたち、言ってみれば未来の目標に向けていま自分たちがなすべきことを設定する、そんな前傾姿勢のかたちで取り組まれる。時を*駆るにあたって障害になるものはすべて排除される。少しでも効率的に早く未来を手に入れることが望まれる。企業活動について言えるのと同じことが、人生の折節についても言えるだろう。ひとびとが待てなくなっていること、あるいは世の中が待ってくれなくなっていることの「ハイケイ」には、時を駆るこういう*メンタリテイがわたしたち近代人に深く浸透してきているという事情があるのではないかと思われる。

しかし、未来との時間的なかわりは「時を駆る」というかたちばかりをとるものではない。「時を駆る」「めざす」のちょうど反対方向のかかわりが、何かの「訪れを待つ」ということだ。あるいは「機が熟すのを待つ」ということだ。これは未来というものに自分のほうから何か仕掛けるのではなく、向こう側から何かやってくるのを待つという、一見したら受動的な姿勢である。

「訪れを待つ」というのは、偶然に身を置いておくということである。あいだに何が起こるかかわらないからそれをも含めて、長い眼で見る、そして自然に機が熟すのを待つ、要は、時が満ちるのを待つということである。

農耕ということが社会的な生産行為の中心であったような時代は、この「機が熟すのを待つ」というのは、農業の最大の秘訣であった。作物は焦って育てようとすれば、かならず失敗する。台風が来るかもしれない、干ばつになるかもしれない、そんな人間にはどうにもならない自然環境の偶然、さらには植物が自然に熟するためどうしても必要な時間、そういうものへの配慮というのが農耕といういとなみにおいてはおもつとも本質的な意味をもつ。焦ってはならないのだ。細心の注意を払いつつ、不慮の出来事への準備もしながら、しかし機が熟すまで待つ、それが肝心なのだ。

ここにも味な日本語があって、「寝かせる」という言葉がある。これはものがおのずから熟成するのを

12	受験番号
中	

国語 その四（六枚のうち）

待つということだ。酒やさまざまな発酵食品をおいしくいただくには、発酵のために必要な時間をしっかりと置かなければならない。その時間をくぐり抜けてはじめてそれらは奥深い味になる。ここでは、時間の^カイカを何の介入もしないでじっと待つことが肝要だ。

これを、「*イニシアテイヴの放棄」と言いかえてもよい。自分が何か仕掛けるのではなくて、向こうが勝手に熟成するのを待つ——子育ての場合なら、子どもがいろいろ冒険をして、ときには痛い目にあっても放っておいて、少し離れたところから静かに見守り、子どもが自分で気づくのを待つ、そう子どもが勝手に育つのを待つ——ということである。

育児のみならず、高齢者の介護、障害者の介助などケア全般について、このことは言えるように思う。ケアにおいていちばん大事なのは、相手を励ますことではなくて、相手が心の深くに抱え込んでいる困難について、きちんと、そしてじっと聴いてあげることだ。「そんなふうに思っではいけない」と言うのではなく、「ああ、そんなふうに思うのですね」と、いったんそのひとのしんどい思いを受けとめ、肯定してあげることだ。そしてそこからそのひとが立ち直ってゆくのを、ひたすらじっと待つ……。

もちろん何でも待っていれば解決するというものではない。政治や経済にはやはりプロジェクト、つまり前に投げかけることが必要だ。けれどもこの「プロ」の心性ですべてを進めればやがてボケツを掘ることになる。プロジェクトの姿勢、つまり時を駆る心性は、もう一つ別の姿勢、つまり訪れを待つ心性によつて裏打ちされ、*補完されていなければならない。

（鷺田清一の文による）

（注） *漫然……はつきりした目的を持たず、いい加減に行うこと。

*惰性……今まで続けてきた勢いや習慣。

*蔓延……悪いものがいつぱいに広がること。

*視野狭窄……ものの見える範囲がせまくなること。

*プロジェクト……企画。計画。「プロ」には「あらかじめ」「先に」「前方に」の意味がある。

*駆る……追い立てる。急がせる。

*メンタリテイ……心のあり方。心性。

*イニシアテイヴ……主導権。

*補完……足りないところを補って完全にすること。

12	受験番号
中	

国語 その五（六枚のうち）

問一 「いま挙げたような例は、待てないと言ってもたわいもないのだが、子育ての場合はもう少し深刻である」とあるが、どのように「深刻」だというのですか、説明しなさい。

問二 「企業や大学にはしばらく前から『評価制度』というものが導入されている」とあるが、この「評価制度」にはどのような問題があるというのですか、説明しなさい。

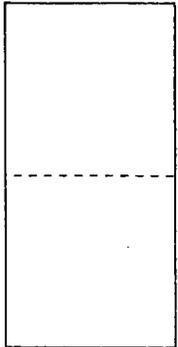
問三 「宮本武蔵は『待たせる』ことで勝った、と言われる」とあるが、筆者は「待たせる」ことがどうして勝つことにつながったと考えているのですか、説明しなさい。

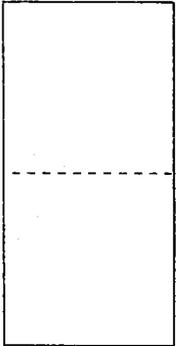
問四 「小さなことで心が躍ったり、落胆したりする、そういう心の動揺にみずからを委ねることで、より大きな、より重大な問題について考えずに済むようにしたのである」とあるが、「より大きな、より重大な問題」とはどのようなことですか。

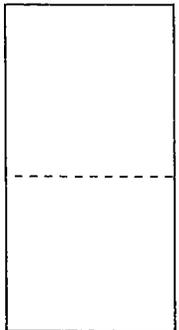
12	受験番号
中	

国語 その六（六枚のうち）

問五 「日本語には『待つ』ことを表わすのにきわめて豊かな表現がある」とあるが、次の空欄に当てはまる漢字を入れて、「待つ」を使ったことわざ・慣用句を完成させなさい。

① 
は寝て待て

② 人事を尽くして

を待つ

③ 待てば

の日和あり

問六 『時を駆る』『めざす』のちょうど反対方向のかかわりが、何かの『訪れを待つ』ということだ」とあるが、「時を駆る」ことと「訪れを待つ」ことはどのような点で「反対」だといえるのですか、説明しなさい。

問七 文中のカタカナを漢字に直しなさい。

カイゼン		
ハイケイ	ケイカ	ソって って
	ホケツ	ホウガイ